

ビバハウス便り(NO.95号外) どうしても「合宿型」若者自立支援制度の

復活を！～「登町ビバハウス」再開1年に思う 2014・2・18

ビバハウス 責任者 安達 俊子

昨年3月初めに町を中心街の入舟宿舎を閉鎖し、もともとのビバハウス発祥の地、現在のビバハウスで全面的な活動を再開して約1年になる。当初のスタッフは、国の支援制度に関わらず、主としてビバハウスメンバーの指導に当たってきた男女1名ずつの指導員と私たちが構成した。しかし程なくして、女性の指導員が退職したので、以前国の事業で頑張ってもらっていた坪内指導員を主任格で迎えた。

入舟宿舎からは6名の若者が移ってきたが、2名が卒業し、余市町内に住んで働いている。それ以降の新入者も加え、現在は男性9名、女性1名の若者が生活している。本来の一本化したビバハウスの特性を生かすため、最初に手かけたのが、全メンバーが参加する「金曜ミーティング」の内容の改善だった。これまでも行ってはきたが、入舟では、ビバハウスメンバーと国の事業の受講生が混在していたので、必ずしも共通テーマでの話し合いを深めることが出来なかった。今回とくに重視したのは、各メンバーがこの1週間で体験した事を具体的に出し合い、それに対する自己評価を必ず報告の中に取り入れるようにしたことである。失敗には失敗した原因があり、成功にはまたその原因がある。それを全員がありのままに出し合って、その中からお互いに学びあう機会とすることを目指した。遅々たる歩みではあるが、毎週の反復で、すこしずつ声も大きくなり、それなりに他のメンバーに理解してもらえるような発言が出来るようになりつつある。

もうひとつはビバ創設以来やってきたビバスコーレ(近藤教室)の復活だ。すでにこれまで余市町立「余市水産博物館」で余市町の減免規定も活用し、3回の見学、先週は、余市町農村活性化センター、明日は、北海道中央水産試験所見学の予定を組んでいる。自主的、創造的学習こそビバハウスの活動の生命線として、今後さらに多面的な学習の場を確保したい。NHKがこの秋から朝の連続ドラマ「マッサン」(余市にあるニッカウヰスキーの創設者竹鶴正孝氏の愛称)を放映するとの事なので、ニッカの見学も欠かせない。

これらの活動にじっくりと取り組めるのも「合宿型」であるからだ。2月になって一気に増えた入所相談者の中には、近くの「若者サポートステーション」には行ってはいるが全く次のステップにつながらないとの声もある。この26日には、大阪の教育NPO、3月1日には武庫川女子大学 大学院関係者の視察訪問をお受けすることになっている。「合宿型」へのご関心の故だと思われる。